

保険薬局における経口抗がん剤の応需状況にみる外来がん化学療法の実状

田中 美幸¹⁾、杉山 純子²⁾、斎藤 翔太³⁾、佐藤 展宏⁴⁾、前田 守⁵⁾、長谷川 佳孝⁵⁾、
月岡 良太⁵⁾、森澤 あずさ⁵⁾、大石 美也⁵⁾

- 1) 株式会社インファーマシーズ エイト薬局 あすか台
- 2) 株式会社インファーマシーズ アイン薬局 豊橋東店
- 3) 株式会社インファーマシーズ 幸生堂調剤薬局 松栄店
- 4) 株式会社インファーマシーズ
- 5) 株式会社インホールディングス

【目的】がん治療の外来治療へのシフトに伴い、薬局薬剤師が外来がん化学療法にかかわる機会が増えることが想定され、薬局薬剤師が高度薬学管理機能を発揮することが求められている。そのためにも、薬局薬剤師は外来がん化学療法の知識習得に努めるとともに、現状を把握することも重要である。そこで本研究では、経口抗がん剤の院外処方状況を調査した。

【方法】2017年1月～2019年10月の期間に当社薬局598店舗が応需した処方箋37,918,955枚について、患者名等の個人情報情報を削除し、年齢を5歳刻みに変換した状態でレセプトコンピューターからデータを抽出し、YJコードにて腫瘍用剤に分類されている経口抗がん剤を含む処方箋応需枚数を集計し、その推移を分析した。

【結果】調査期間を通じて、月別の全処方箋応需枚数に大きな変化は見られなかったが、経口抗がん剤を含む処方箋応需枚数には増加傾向が見られた。全処方箋に対する経口抗がん剤を含む処方箋の割合は、2017年1月は1.25%だったが、2019年10月は1.35%まで経時的に増加した。女性患者から応需した処方箋枚数の比率は、2017年1月は50.8%だったが、2019年10月は52.5%に増加した。各年の患者年代別処方箋応需傾向は3年を通じて同様であり、男性では70歳代をピークとした上に凸型のグラフ、女性では40歳代と60歳代で急激に増加するグラフとなった。

【考察】全処方箋枚数に変化はなく、抗がん剤を含む処方箋に経時的な増加傾向が見られたことから、がん治療の外来化学療法へのシフトが加速していることが示唆された。また、外来がん化学療法の対象者に占める女性の割合の増加と、男性と女性で外来がん化学療法の対象年代の傾向に明確な違いがあることなどが確認できた。薬局薬剤師は抗がん剤の知識だけでなく、本調査で得られた知見なども参考にして、対象患者の背景に合わせた高度薬学管理の発揮に努めることも重要と考える。

(第30回医療薬学会年会(2020年10月, Web開催)にて発表, 一部要約)